

令和8年10月22日

教師の質の再定義に向けて―「変化し続ける力」と「開かれた教員養成」

元埼玉県立高校教諭 元埼玉県教育委員会教育長 関根郁夫

0.はじめに

3つの視座から、教師の質について考える。

視座 1:子どもたちが現代社会で生活するために必要な資質・能力の育成

共通の規範・文化の継承や必要な学力育成などから見る教師の質

視座 2:学校が直面している課題への対応

教員不足や不登校児童生徒の増加、保護者への対応などから見る教師の質

視座 3:教育の本質の掘り下げ

「生きること」「教育」の本質から見る教師の質

教師の質を考える際には、いずれの視座も検討する必要がある。しかし、ここでは、視座 1・2ではなく、視座 3 を中心に考察する。

1.教育とは

教育とは、人によい変化(人格の完成を目指した成長)を促す営みである。この営みの特長は、未完のままであるということにある。

生きるとは、他者と関わりながら、変化し続けることである。諸行無常の世界は、「生」の世界である。関わり合いながら変化する、希望に満ちた世界である。

変化し続けることが生きることであるならば、目標を達成した時点で、次の目標へと向かって変化し続けなければ、生きていることにはならない。達成は、通過点に過ぎない。達成を目標としつつも重視しすぎず、過程を重視する姿勢、つまり、今を生きているということ、一回性の中にしかない経験、教育を受けて変化していることが重要となる。

それは、試行錯誤することや失敗を許容すること、異なる他者と関わる越境的な学びが教育の中心にあるということの意味する。

2. 教師とは

【エピソード】

初めて学級担任を受け持ったのは、新設校1期生の3年生。彼らは現在、65歳。私は彼らに何もしあげられなかったと思っているが、彼らは私にいろいろしてもらったと言う。また、その頃、年配の教員から「若いということだけで、生徒たちはついてくる。いずれ歳を取る。今のうちに、実力をつけておきなさい」と言われた。

若いということは、未熟で伸びしろがあり、変化(成長)率が大きいということである。教師が人として、泥臭く成長する姿、子どもたちと向き合う姿が大事なのではないか。あのとき、互いの成長しようとする姿勢が共鳴し合い、互いの生命が輝いたのではないか。

【教員の質とは】

教師の質とは、教員としての力量と変化率のかけ算であると捉えてきた。

これまで、教師の質を語る際には、「できる」という到達点が重視されてきたように思う。しかし、生成AIが知識・技能の習得を支援できるようになった今、成長し続ける・変化し続けるという物差しが重要となる。

教師の質の軸足を、「専門職としての知識・技能」の多寡から「変化し続ける力」へと移すときがきている。「変化し続ける力」とは、「他者と関わりながら、試行錯誤を通じて、自分自身を変化させ続けようとする力」と捉えている。常に問を持ち、挑戦し、関わり、生の体験から自らを振り返り、気づきを得て変化を続ける力である。

その力を持つ人が教師となり、子どもたちとリアルに関わり合いながら、子どもも教師も成長していく。「変化し続ける力」が、教員の質の中核であると言ってもよいのではないか。

3. 生成AI時代の教師とは

「AIに何をしてもらうのか」から考えるのではなく、「人である教師が何をするのか」から考えていくことが重要である。子どもと関わり合う中で成長する教師、という存在は、決してAIでは担うことができない。これこそが教師という職の本質であり、不易でありつつ、これからの時代であるからこそ大事にされるべき価値ではないか。

「変化し続ける力」は、子どもだけでなく、教師が子どもと向き合う中で教師自身においても育てるものである。教師が子どもとの関わりの中で変化し続けるという、教職本来の営みに、教師が専念できる環境をつくる。この「専念できる専門職」という実感を中心においた再構築が、目指していくべき方向性ではないか。

このことは、教師志望者の心理的ハードルを下げ、量の確保につながり、また、長期的には教師の質の確保にもつながると考える。

4. 視座2から見て、学校はどう変わるべきか

不登校の増加、少子高齢化による人口減少、AIの発達などが、学校を変えつつある。

不登校の増加で、「学びの多様化学校」が増えると同時に、あらゆる学校が「学びの多様化学校」のようになっていく。

人口減少の中で、教師以外の人たちも、より学校教育に関わるようになる。あるべき論から設計される学校教育が、リソースの減少・不足を前提にできる形で実現するものへと変わっていく。

AIの発達で、AIも活用した個別最適な学びがより役割を増す。

こうした変化が生まれつつある中、学校はどう変わるべきか。

(1) 「ゴール」から「プロセス」へ

ゴールに到達することやテストの点数を競うのではなく、未知の世界に触れたときの「ワクワク感」を大切に、非効率な世界において試行錯誤しながら変化し続ける自分、今を生きることを楽しめる力を育む。

(2) 「一斉一律の管理」から「学びの多様化」へ

これまで一部の子のための「特例」と考えられていた多様な学びを、すべての子どもに開いていく。すべての子どもは異なる前提で、一人一人が幸せに豊かに今を生きられるようにする。

(3) 「教師がすべてを抱え込む孤立した密室」から「社会全体で支えるネットワーク」へ

教師のみが社会のセーフティネットの代行となることをやめ、学校をコアとしながら、専門家や地域と連携しながら子どもと向き合う。様々な大人が「先生」となっていく。

これらの実現のためには、社会で起きる課題をすべて学校(教師)の責任として背負わせないことや、「全員が同じようにできなければならない」「失敗できない」という学校にも存在するプレッシャーなどを乗り越えていくことも必要になる。

人的リソースの不足は、学校の姿を大きく変えるかもしれない。それは、「どう変わるべきか」というべき論からスタートするのではなく、「変わらなければ、子どもたちの教育の質を保障できない」という止むを得ない選択になると思われる。教師を確保できない地域が生じたとき、子どもたちへの教育の質をどう保障するか。止むを得ない選択があり得ることを想定し、学校の在り方や教師の在り方について検討を始めなければならない。

5. 未来の「教師」へのいくつかの願い

(1) 目指す方向性を示す教員養成と過程を重視する仕組みの構築

教員養成段階で、成長率の高さという強みを学生に自覚してもらえよう指導してほしい。養成

段階では、教師として求められる力の全体像を示し、目指す方向を自ら決めていくことを支えるとともに、資質能力の基礎的な力を身に付けさせてほしい。教師としての力量は、教師を務めながら高めていけばよい。

そして、教育について、目標の達成を重視する仕組みとしてではなく、目標達成を目指して、非直線的に成長する過程を重視する仕組みとして捉えて、構築してほしい。

(2) 挑戦を応援し、失敗を受容する、多様性を認め合う文化の再興

教師の「変化し続ける力」を高めるには、挑戦することを支援し、失敗してもそれを受け止める文化、トラブルも摩擦も存在することが自然であるとして受け入れる文化、それぞれが異なる強みを持っていて、それを認め合い学び合う文化を、教師集団の中にも作っていくことが大事である。生身の体験と関わりを通じて、教師も子どもも成長する機会こそ大切にすべきである。

その一つの方法として「学びに向かう力を育てる授業研究」が有効ではないか。授業研究は、新しいことに取り組み、失敗を糧に更に高みを目指すものであり、教師同士が対話をしながら教師の力量を高める点で効果がある。なお、研究のための研究とならないよう、研究成果が流通する仕組みを検討してもらいたい。

(3) 真の意味で「開かれた教員養成」の実現

「開かれた教育課程」と同様に、教師の資質能力の向上も、社会に開かれたものとなっていく必要がある。

現在、「多様な専門性や背景を有する社会人等が教職へ参入しやすくなる制度」の検討が進み、学校への入口を広げようとしているが、学校からの出口も広げる必要がある。人生百年時代、教師が他の職へ自由に転職し、また教職に戻りたい人も自由に戻ってこられる、出入り自由な職として教職を位置づけ直す必要がある。

教職で培った力量(変化し続ける力)と、他業種で身に付けていく資質においては通用性があるのではないかな。そういった問題意識で、教職課程・研修の内容そのものを設計し直していくことも必要である。

6. 結び

教師という仕事の値打ちは、子どもを指導することについての知識・技能の量ではなく、子どもと共に変化し続けようとする姿勢そのものにある。その姿勢を教師自身が保ち続けるためには、教職を学校の中に閉じ込めるのではなく、社会に開かれた、出入り自由な職業として位置づけ直さなければならない。

教師の質の再定義とは、単なる制度論ではなく、私たち大人自身が「変化し続ける」ことの価値をどう社会に示すかという問いでもある。AIが知識・技能の習得を支える時代、教師の質を「変化し続ける力」と捉え直し、教職を開かれた世界の一部とすることで、新たな時代においても、教師が教師として輝くことを、元教師として願う。

多様な人々が学校教育に関わるようになる中で、教師の専門性とは何か。教職が真に多様となる中で、教師の強みとは何か。そして、あるべき論だけでなく、必ず生じる絶対的なリソース不足を出発点とした上での、子どもたちの学びをどう確保するか。それらについて議論してもらいたい。